

なんと美しい日曜日！

ブーヘンワルト強制収容所・1944年冬

II

ホルヘ・センプルン著

榊原晃三訳



なんと美しい日曜日！ II

— ブーヘンワルト強制収容所・1944年冬 —

ホルヘ・センプルン 著／榊原晃三 訳

岩波現代選書

なんと美しい日曜日ノⅡ

岩波現代選書 117

一九八六年十一月一七日 第一刷発行 ©

定価二二〇〇円

訳者 榊原晃三
さかき ぼら こう ぞう

発行者 緑川 亨
りく かわ へい

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発行者 岩波書店
株式会社

電話 〇三二六五・四二二
振替東京六二六三〇

印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004786-8

「おい、おれに会いたかったんだって？」

わたしは〈労働統計部〉の事務室でダニエルにたずねる。彼は笑いながらわたしのほうを向く。

彼はときどき笑っている。わたしが見かける時はいつも笑っている。しかし結局、わたしは彼にだって笑わないことがあるにちがいないと思う。ときどき、彼にも笑わないことがあるにちがいない。そこで、真実への心遣いから、わたしは彼がいつも笑っているとは言わない。ときどき笑っていることがあると言うだけだ。わたしはリアリズムの作家だ。それは信じてほしい。

「なあ、おまえはにげたんだろ！」とダニエルがわたしに言う。

そのとおりで。わたしはヘンク・スプネーとにげたのだった。

結局、わたしを撫の太木のそばから追い立てたナチス親衛隊は、モゼル銃の銃口をわたしの背中に押しつけながら、わたしを収容所の門のところへ連れて行くことに決めたのだった。この喜歌劇においては、彼に振り当てられたのは死の天使の役柄ではない。彼はそのこと

を最後の瞬間に感じたにちがいはなかった。

彼はわたしを収容所の門のところへ連れて行き、そして一時間前にヘンクとわたしに外出を許した。当直将校が当直室から飛び出して来たのだった。彼らはわたしを監視塔の一階にある窓のない一室に押しこんだ。彼らは二人とも大声を上げて、報告書を調べ、真赤になって怒っていた。

わたしは顔をなぐられようとしていた。それは予想できることだった。

しかし、その時、突撃隊長のシュヴァルツがやって来た。彼はこの事態の処理を引き受けたのだ。彼が部屋に入って来るとすぐに、わたしはあらためて彼の前に出頭したのだった。体を硬直させ、頭を真直ぐに立てて、わたしの登録番号、所属労働班、収容所の罫いの外にいた理由を大声で言った。確かに完璧な自己申告だ。わたしはこのささやかな演技がとても上手になり始めていた。

突撃隊長シュヴァルツがそっけない声で再びわたしを訊問し始める。わたしはやはりそっけなくそれに答える。勤務、勤務のためだと。世界のどんな軍人も簡潔を好むが、親衛隊の軍人たちはそれに夢中になる。

シュヴァルツは、わたしが一時間前にヘンク・スプネーといっしょに確かに当直将校に申告したかどうか確かめたのだった。そして、われわれの登録番号と罫いの外に出た理由とが確かに報告書に記載されていることを確認したのだった。彼はわたしにわたしが一人で戻って来た理由をたずねたのだった。わたしは彼に、スプネーが予定よりも長く（ヘンバウ）に引き止められ、わたしだけ送り返して

〈労働統計部〉での仕事を続けるようにしたのだと答えた。

彼は肯いた。こうしたことはすべて規則どおりだったのだ。

彼はそれから、訊問のもっとも微妙な局面に近づいた。わたしはそれを先刻覚悟していたのだった。「なぜおまえは道路からはずれたのか？」と彼はわたしにたずねる。

わたしは彼の顔をまともに見る。わたしのまなざしが無垢であることを彼が見る必要があるのだ。

「突撃隊長、それは樹木のためです！」とわたしは彼に言う。

こういうふう呼びかけるのがわたしにとっては得であり、彼が親衛隊の位階制の中で占めている階級をわたしが彼に正確に指摘していることを、わたしは知っている。親衛隊の連中は、人が彼らの複雑な階級制の中でとまどうことを好まないのだ。

「樹木だと？」と彼は言う。

「そこに、ぼつんと離れて、一本の樹木がありました。樨の木です。とても美しい樹木です。わたしはとつぜん、その樹木はゲートにゆかりのある樹木ではないだろうかと思いました。それでその樹木に近づきました」

彼は非常に興味をそそられた様子だ。

「ゲートだって！」と彼は叫ぶ。「君はゲートの作品を知っているのかね？」

わたしは頭を慎ましく下げる。

彼はわたしに「君」と言ったのだ。たぶん自分では意識してなかったろうが。わたしがゲーテの作品を知っているということが、即座に彼の口調を変えさせたのだ。

やはり、教養というものはよいものだ。

「それに」と突撃隊長シュヴァルツは言う。

「君はドイツ語をとても上手に話す。どこでドイツ語を習ったのかね？」

わたしはこういう瞬間を以前すでに経験したような、すでにこれと同じ質問に答えたことがあるような気がする。

そうだ。それは一年半くらい前、われわれ——ジュリアンとわたしをレ・ロームへ運んで行く汽車の中でのことだ。ドイツ軍の検閲があつて、その士官は、全乗客の身分証明書を見終ると、その荷物をちらっと見て、はつきりしないフランス語でこうたずねる。

「あのスツケースはだれの物か？」

わたしは目を上げて、彼がわたしのスツケースを示しているのを見る。そのスツケースはわたしがスミュールへ運ぶ途中のもので、その中には分解したステン軽機関銃と完全装弾した挿弾子がいくつか入っている。ジュリアンは別のスツケースを持っていて、それは彼の頭上の網棚に載っている。

わたしはジュリアンを見ない。わたしは彼がわたしと同様スミス・アンド・ウェッソン四五口径を持

つていて、ズボンのベルトに差していることを知っているのだ。

わたしは（国防軍）の士官のほうを向いて、こう言う。

「それはわたしのです！」

すると、彼は顔をうれしそうに輝かして、こう言う。

「ほう！ あなたはドイツ語を話すのですね！」

わたしがドイツ語を話すことに彼が喜んでるのは明らかだ。

士官が丁寧な口調で言う。

「では、その小型トランクの中になにを持っていますか？」

それに答えるのはお安いご用だ。

わたしは思い出そうと努力しているみたいに、かすんだまなざしをする。そして彼に言う。

「シャツが二、三枚、茶色の短靴が一足、グレーの背広一着と言ったところです。ただの身の回りの物ばかりですよ！」

わたしはスーツケースに入れて運んでいそうな身の回りの品を全部数え上げる。

士官は顔を輝かして、首を動かす。

「あなたは実にきれいなドイツ語を話しますね」と彼は言う。「どこで習ったのですか？」

そこで、わたしは少々得意そうな顔をして、こう言う。

「わたしどもの家ではいつもドイツ人女性の家庭教師がいましたのでね！」

士官は称賛を寄せるような、ほとんどなれ合ったような顔で、わたしに微笑みかける。

「ありがとう」と彼は上半身をかがめながら言う。どうやら、わたしの家庭にいつもドイツ人の女教師がいたということが彼の国民的自尊心を満足させるらしい。そして、わたしのことに關して全的に彼を安心させるらしい。そういうわけで、彼はそれ以上そのスーツケースの中身をたずねたりしない。それを開けるということはまったく余計な手続きとなったのだ。ドイツ人女性の家庭教師の手で育てられた青年がスーツケースに禁止されているような物品を入れて運ぶなんてあるはずがないと言わんばかりなのだ！

士官はわたしに最敬礼して、そのコンパートメントを離れる。

わたしはその時、ほかの乗客全員がわたしを疑ぐり深い顔でながめるのに気づく。

ジュリアンもわたしをながめるが、彼は疑ぐり深い顔でなく、あっけに取られたような顔をしている。

「へえ、おまえ、ドイツ語をしゃべるのか？」と彼はわたしの耳元に口を寄せて言う。

「なにが言いたいんだ？　しゃべったっていいだろう！」

「でも、いったい、やつになんと言ったんだい？」

「本当のことを言っただけさ」とわたしは彼に言う。

ジュリアンがぶっと吹き出す。

「まさか？」

「いや、おれのスーツケースの中身を教えてやったんだ。やつはそれを知りたがったんだから！」
ジュリアンはもっとわたしの耳元に口を寄せる。彼は笑いをこらえることができないのだ。

「おまえのぼろ靴にいったいなにが入っているって言うんだい？」

「いや、大したものじゃない」とわたしは彼に言う。「シャツ二、三枚、グレーの三つぞろい一着、短靴一足つてところで、みんな、身のまわりの物ばかりさ」

そこで、ジュリアンは危く窒息しそうになる。膝の上をたたくばかりだ。

ほかの乗客たちは相変らずわれわれを見ているが、今は不安そうな顔をしている。

しかし、これは一年少々前のこと、われわれ——ジュリアンとわたしをジョワニーからレ・ロームへ運ぶ汽車の中でのことだ。

そして、今日、突撃隊長シュヴァルツがわたしに問いかけるのも、あの時と同じ質問なのだ。彼はわたしがどこでドイツ語を習ったのか知っていたがっているのだ。わたしは彼にあの時と同じ答を返す。

「わたしどもの家ではいつもドイツ人女性の家庭教師がいましたのでね！」

わたしは突撃隊長に、スペインのわれわれの家ではいつもドイツ人女性の家庭教師がいたと説明する。わたしはずっと幼い年ごろからドイツ語を習い、勉強中たえずドイツ語を使っていたのだ。そう

だ、わたしはゲーテの作品を知っていて、それに激しく興味を持っているほどのだ。

シュヴァルツがわたしをながめて、眉をひそめる。問題を抱えているような顔つきだ。

「ドイツ人女性の家庭教師が？」と彼は叫ぶ。

「君はいい家庭の出なんだよ！それで、君はここでなにをしているんだね！」

それこそ、シュヴァルツの問題なのだ。わたしがそんなに結構な前歴を持ちながら、自力で生きて来て、あんなごろつきどもやテロリストどもといっしょに、要するに囲いの悪い方の側であるここへやって来たのだろうか、と彼は自問しているのだ。

わたしは言わなければならない。わたしの社会的出自はわたしをうんざりさせ始めているのだ。あるいはむしろ、わたしがその出自を心ならずも利用しているそのやり方、人からその出自を投げつけられるやり方がわたしをうんざりさせ始めているのだ。わたしがそんなに結構な社会的出自を持ちながら、なぜここにいるのか、労働による再教育を行なう強制収容所などにいるのか、その理由を理解できないのが、今日の突撃隊長シュヴァルツなのだ。彼にはわたしがゲーテに興味を持つことができることが分らないのだ。それは、レジスタンス行為のゆえに強制収容された一人のスペイン赤軍から彼が作り上げている観念にそぐわないのだ。シュヴァルツは眉をひそめる。困惑しているのだ。その点が彼には怪しく思われるのだ。

わたしがかつてそのような社会的出自を持つてゐるのにかかわらず、〈労働統計部〉に受け入れられたのはどれほどの親切のおかげだったかを、わたしに説明したのはザイフェルトだった。ブルジョワ家庭出身の哲学を専攻する学生、そんなものを自分の事務室に見るのは、彼ザイフェルトにとっては初めてのことだった！ 彼はわたしにその点を不器用に指摘してみせた。わたしはテストを受ける資格を許されただけに過ぎないというような印象を受けた。ほんのちょっとした過ちがあるだけで、わたしは地獄に、つまりわたしの階級的出自の大鍋に送られて永遠に煮られるにちがいない。

その後の、政治生活の間も、やはり同じことだった。そこでは、わたしの階級的出自は影の中に隠れていたが、ほんのちょっとした協調のない考えを示しただけで、それは今にもわたしにとびかかって来そうだった。わたしは黙って自分の社会的出自を叱りつけながら時を過ごした。わたしは自分の社会的出自に向かって、まるで家畜に話しかけるように話した。

「寝てなさい、寝てなさい！ お客さんのじゃまをするんじゃないよ！」と。

しかし、公正に語ろう。同志たちが党の影響、その誉れ、その広大などを強調する必要に迫られた時、わたしの社会的出自は、ある種の執拗ささえ伴って、積極的に利用されることがしばしばあった。紳士淑女の皆さま、わが党がどんなに広い心を持ち、セクト的なところは少しもないことをごらんください！ われわれの同志サンチェスは、貴族階級と縁続きの大ブルジョワの家族の出身です。彼の従兄弟や従姉妹の中には公爵や公爵夫人が何人もいます！ それに同志サンチェスは知識人では

ありませんか？ しかも、彼はわが偉大にしてすばらしきスペイン共産党の最高責任者の一人に至ったのです！というわけだ。

わたしはまるで誕生日か賞状授与の写真が撮られるみたいにお利口で慎ましやかな顔をしていた。自分のまわりに、頬をふくらませてトランペットで自分の社会的出自を吹き鳴らすかわいい天使たちが飛び回る音を聞いていた。まさにムリーリョの絵を見るようだった！

ところが、この幸福の時代はそういつまでも続くはずがなかった。この世では、なんでも終りがあるものだ。わたしの社会的出自は何度も顔をのぞかせた。真黒なぼろ衣をまとうて異様な姿となったマクベスの魔法使たちのように。わたしは結局、改めてブルジョワ出身のインテリになっただけだった。本質的に疑惑に、迷妄に、否定癖のある精神に、信頼の不足に、大貴族のアナーキズムに捧げられたブルジョワ出身のインテリに。

一九六四年三月に、ボヘミアの諸王たちの古城において、そこでわたしの運命が決定された長テールブルに向かつて座った。裁判官に仕立てられたわたしの同志たちの言葉を、わたしは聞いていた。わたしは自分が有罪だとは少しも感じていなかった。わたしは彼らをながめていた。ボストンの名門家族がヘイフラワー号の渡米者の血筋デサンデルを引くように、あるいは猿が木から降りるデサンデルように、労働者階級の血筋を引いたこれら新しき清教徒たちを。彼らはわたしをむしろ笑わせていた。まったく涙の出るほどおかしかった。

わたしはこれら人民の息子たちが、少くともその大部分の者たちがどのような者になったかをよく知っていた。つまり、彼らは党組織の廊下や控え室や宮殿の中に吹く風に戦々兢々とする臆病でひねくれ者の役人になったのだ。わたしは彼らに言つてやりたかつたのだった。指導者たちは労働者階級の出身なのだ、トレーズ家だとか、ラコシ家だとか、ウルブリヒト家だとか、ゴットヴァルト家だとか、と。それから、わたしは出自を忘れているが、彼らはそれを手放さず、わたしの予想する場所で、それで身を鎧うことができた。しかし、こんなことを彼らにいくら説明しようとしても何の役にも立たないだろう。彼らは、わたしの運命が決定された長テーブルのまわりに座っていた。きびしいが公平な使徒のように。小さな焰の舌が彼らの頭上で燃え上がっていた。聖霊が彼らの禿頭の上に下つたのだった。なぜなら、彼らは労働者階級の出身だったからだ。わたしは自分の地獄に戻って行くだけよかったのだ。

しかし、今は、話はまだそこまでいいない。今日、わたしにわたしの社会的出自を思い出させるのは、ザイフェルトでもカリーリョでもない。それは突撃隊長シュヴァルツだ。彼は、わたしがそのような社会的出自を持ちながら、このブーヘンワルトの、悪い悪いほうの側にいることにおどろいているのだ。

こうして、わたしは、それぞれ逆にすれば同一になる理由のために、一方の側からも他方の側からも常に疑いの目で見られる人物であることだろう。いつの日にか、わたしが彼ら両方の側の者たちに、

インテリのコミュニストがどんなものであるかを説明することが確かに必要になるだろう。この本を書き終らないうちにも、わたしの興味を作るもの、わたしの存在理由であるものは、まさしくわたし
が疑わしい人物とされる点であるということを、わたしは彼らに説明しなければならぬだろう。もし
わたしが疑わしい人物でなかったとしたら、わたしはブルジョワ出身のインテリのコミュニストで
はなくて、ブルジョワのインテリであるだろう。もしわたしが疑わしい人物でなかったとしたら、わ
たしはブルジョワの生産利潤全体を再生産するのに、わたしのイデオロギー的仕事でもって協力する
番犬インテリ、学のある熊に過ぎないだろう。もしわたしが疑わしい人物であれば、それはわたしが
自分の階級を裏切ったからである。しかし、この裏切りは、わたしにとっては付随的なものでなく、
本質的なものだ。自分の階級とともに他のあらゆる階級を、全体の中の諸階級の社会を裏切る使
命、意志、能力を——それに機会も——持ったがゆえに、わたしは自分の階級の裏切り者であるが、
それはわたしの役割り、（わたしはここではもちろん、言語の隠喩もしくは便宜をもつてしか一人称
について語らない。つまり問題なのはこのわたしではなくて、一般に知的なコミュニストを総称的に
指しているのである）、つまり知的なコミュニストとしてのわたしの役割りは、まさしく諸階級をそ
れ自体として否定し、なんらかの形を取って現われる階級の社会を否定する役割りである。いわゆる
異例の出世をする危険、政治の現実と現実の政治とを名づけるための用語である（現実政治^{レアルポリティクス}）の紆余
曲折を理解しない危険を冒してまでもそうして現われる階級の社会を否定する役割りである。つまり、

實際上、保守的政治そのものを、革新的政治と名づけるためである。この革新政治は、本質的には現実の否定であり、合法の秩序と歴史の自然な流れの創造的で無秩序な変動である。そこから、わたしの役割りの実により得べからざる性格が生じる。もしわたしが疑わしい人物でなければ、従って、否定の精神の邪悪な手先、社会の利益の全体に対する永遠の批評家であるわたしは無に等しい。インテリでもなく、コミュニストでもなく、わたし自身でもないのだ。

しかし、結局、こうしたことを、少くともこうした用語を使って、突撃隊長シュヴァルツに説明することはわたしにはむずかしい。

そこで、わたしは彼の質問に答えるのを避ける。

「突撃隊長ハットシュトルムフューラー、わたしはその樹木をゲートにゆかりのある樹木と信じたのです」とわたしは彼に言う。「もつと近くから見に行ってみようという誘惑に勝てなかったのです」

シュヴァルツは、分かったと言うように肯いた。

「そりゃ、君の思いちがいだ」と彼は言う。「ゲートが自分の名前の頭文字を書きつけた樹木は、収容所の中の、炊事場と〈備品室〉の間の広場にあるんだ！ それに、樵ではなくて櫟の木だ！」

わたしはもちろんそのことをすでに知っていたが、その時初めて、そのよい便りを知って喜んでいるかのように、それにふさわしい身振りをしながら、とびきり強い興味を示してみせる。

「ああ！ あれがその樹木ですか！」

「そうだよ。丘の樹木を伐った時、あの樹木だけはゲーテの想い出のために切らずに置いておいたのだ！」

そして彼は、ドイツの優秀な文化伝統に対する社会国民的敬意について長々と演説し始める。わたしは彼を真正面から見ている。相変らず気をつけの姿勢を取っている。それは習慣であるが、わたしはもう彼の話を聞いていない。ゲーテとエッカーマンは彼の話を聞いて満足するだろうとわたしは思う。驚の大通りの、樅の木 of 贅沢な美しさをわたしは思う。ダニエルは先ほどわたしになにか言うことがあったのだ、しかしわたしは彼には何も話さないでヘンクと出かけてしまったのだと思う。わたしはまた、今日は日曜日なのだ、突撃隊長シュヴァルツは陰険なやつだ、イギリス軍がアテネでELAS（ギリシャ自由国民軍）のゲリラ部隊を粉碎したのだと思う。わたしはさらに、自分は今にげ出たがっているのだと思う。

この時、三人の親衛隊とわたしがいる部屋のドアがたたかれる。あるイマージュがはじける。ドアが開いて、ヨーハン・ヴォルフガンク・フォン・ゲーテがおごそかに入って来るだろうというイマージュが。

実際に、ドアが開く。

しかし、入って来るのはゲーテではなく、仲間のヘンク・スプネーである。